



桐に恋して18年

（株）グリーンフラッシュ 代表取締役
八木 隆一

娘が生まれると桐を植えて、その桐で筆筒を作り娘を嫁がせる、実は正確ではありません。桐は成木になるまで最低20年、それから雨に打たせてアクを抜きながら天干して製品になるまで、都合25年の歳月は必要です。昔は16歳から嫁いでいましたから、その娘さんは周囲が心配するほど晩婚だったことになりませう。この言い伝え、実はおじいさんが植えた桐の木を使ってお父さんが筆筒を作ったのに、酒の勢いで「俺が植えた桐だ」と娘に見栄を張ったのがそのまま美談として流布されたのがどうやら真相のようです。桐は寒暖や日長時間に適合して三十種類もあるので、南方の促成桐の話だったのかも知れません。生まれながら桐の木、嫁に行けば桐筆筒、この世とのお別れは桐の棺桶、これほど日本人に親しまれてきた木ですが、桐筆筒の名工から、桐の原木生産地の話はよく伺いますが、どの種類の桐が最も筆筒に適しているかという話題を耳にしたことはありません。桐はまだ奥の深い木なのです。そんな桐を18年間育て、新製品を開発してきた中で、桐特有の肌触り、断熱性、調湿性、耐火性、防虫性能、クッション性は、『アク抜き』工程を経た製品だけが有する機能であり、アク抜きをしていない漂白のみの製品では、逆はじめつとしたり、カビも変色に悩まされることをつくづく体験してきました。私がどうして桐に魅せられたか、国内外での桐の植林と桐製品の開発を通して、『アク抜き桐』とその製品開発について、4回にわたる連載にお付き合いをいただきます。

私が、桐にたどる着くまで
の経緯をお話しします。

20代の頃は外国航路の貨物船航海士として地球を3周50カ国を回っていました。20世紀後半、コンピュータの進歩で航海士としての技術が要らなくなり、思い切ってアフリカのジャングルでの原木仕入れの仕事に転向しました。

5年が過ぎたある日、モアビやブビンガなど直径1尺を超え原木買い付けのため、セスナに乗って奥地に向かう途中、眼下に木はありませんでした。パイロットに「お前が5年間て全部買ってしまったんじゃないか」と言われ、これほどの大規模な自然破壊に手を貸していたのかという懺悔の気持ちに包まれました。そんな時、アメリカ東岸でのポプラ平行合板工場立ち上げの仕事が回ってきました。当時大人気だったオーク材

自然破壊を悔いて桐の木の植林へ



植林した桐の傍に立つ著者

の伐採跡地には、ムク材では曲がりが多いボアラの木が繁茂していました。伐採量より生える量が多いこの木を原材料とし、製造過程でおが粉を出さない合板は、製材品製造に比べ原木の歩留まりが著しく改善し、自然破壊の大幅緩和にもつながると教えられ、タイプII平行合板の製造販売に従事するようになりました。

しかし数年後、今度は合板の接着剤によるシックハウス症候群が問題となり、自然破壊のない促成木で健康増進に貢献できる木を探した結果、

たどる着いたのが桐の木でした。たまたま仕事で中国に行った時、サラリーマンの貯金でも見渡す限りの土地を借りられることを知り、桐の植林をまず中国で開始しました。そして、建材用途ならば十分使用できる桐の成木が中国では十年余で育つことが分かり、自社で使用する桐の木の植林を無農薬、無化学肥料、無除草剤で実施してきました。2007年、アトピー性皮膚炎、化学物質過敏症を治療するドクターの新たな癌治療室を当社の『アク抜き桐』で施工しました。その際、

『樹種は桐、植林は無農薬、製法はアク抜き』の三点セットで患者さんが過ごしやすい癒しの空間施工を試みましたが、医療とのタイアップのきっかけとなりました。

船

乗り時代、貨物船にはドクターが乗船していないため、洋上での外科手術は航海士の仕事でした。前職が医療と桐を結ぶ架け橋となってくれたのです。それまで、

木、材木は家や家具を作る素材だと思っていました。しかし、桐の場合、おばあちゃんに笑顔が戻ったり、患者さんに笑顔が戻ったり、真冬に家に帰ると、暖房もかかっていないのに家の中がほっこりしていたり、熱帯夜暑くて身の置き所がないときは、桐床に寝転ぶと気持ちよく眠れたり、アク抜きした桐は建築素材でありながら、健康素材として感動を与えてくれました。

こうして弊社は自社で桐の植林を行い、自社の『アク抜き桐』で桐建材、家庭用桐製品の製造販売を行う会社として歩き始めました。適材

適所で桐をお使いいただくため、桐新商品の開発にもいそいそと取り組んでいます。

（株）グリーンフラッシュ
電話03・57226・8110